



1 はつめい

5月上中旬は開花期となり、5〜7月にかけては生理落果期になります。

令和6年産温州ミカンの着花は、県農業試験場府中果樹研究所での結果母枝の水挿し調査結果、令和5年産の着花(果)状況などを踏まえると、少ない傾向と予想されます。

また、開花期から落弁期は、訪花昆虫や灰色かび病、そうか病、黒点病の防除時期となります。春先から開花期にかけて、平年よりも気温が高くと、生育進度が早くなり、開花も前進する可能性があるため、園地の生育状況を確認して、防除を実施しましょう。

2 温州ミカンの枝管理

着果量のバラツキを是正し、連年結果する園地にしていくためには、新梢の発生と着花のバランスがとれていることが重要です。それぞれの樹の着花状況に応じ、適切な管理を中心掛けましょう。

この時期は新梢の伸長や開花結実など細胞分裂が盛んな時期となります。新梢の緑化促進や子房の充実を図るため、尿素(500倍)やメリット青(300倍)、ジャップフル1号(300倍)等の窒素主体の液肥を開花前後から7〜10日おきに3回程度葉面散布します。

(1) 不作樹の管理

前年着果が多い樹は、結果母枝が少ない一方、果梗枝が多く、そこから新梢が多く発生します(写真1)。

新梢と花との間での養分競争により落果しやすいので、果梗枝が密生している場合には、果梗枝を整理し、さらに樹形を乱す要因となる上向きの果梗枝も切除します。



写真1 花(灰色囲み)と養分競合する果梗枝から発生した新梢(青色囲み)

枝葉が込み合った状況では、日照不足により落果を助長しやすいので、着花部位への被さり枝は、日照確保のため除去します。また、強く長い春枝や遅伸びの春枝は、芽かぎをするか、基部からせん除します。

このため、可能であれば着花を確認してから、せん除してください。

(2) 豊作樹の管理(予備枝の追加設定)

着花の多い樹で、新梢の数が十分でない場合は、予備枝を追加設定して、新梢の発生を促し、結果母枝の確保に努めます。

予め、せん定時に設定した予備枝に着花した場合、できるだけ早期に、摘蕾を行います。

また、白筋の入った鉛筆程度の

太さで横から斜め上向きの枝の小枝を対象に、蕾・葉を取り除いて坊主枝にすることで、新梢の発生を促すことができます(図1)。

発生した新梢は、ミカンハモグリガやアゲハの幼虫などの被害を受けますので早めに防除を行いましょう。

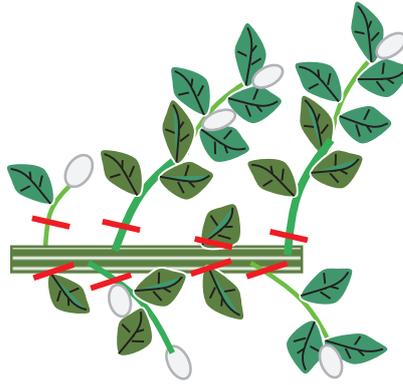


図1 予備枝の設定(坊主枝)

③カンキツの摘果

(1) 摘果の目的と方針

摘果の目的は、果実肥大の促進、隔年結果の防止、キズ・奇形・病虫害被害果や低品質果実の除去により品質を揃えることです。温州ミカンでは中玉果が、中晩柑では大玉果が求められます。摘果は時期を早めると果実の肥大は促進され、隔年結果防止

効果も高くなりますが、品質は低下しやすくなります。一方、時期が遅いと、果実品質は向上しやすいますが、果実の肥大が抑制され、隔年結果防止効果は低くなります。これらのことを踏まえつつ、品種や着果量に依り、粗摘果と仕上げ摘果の程度と時期を変えて着果管理し、高品質果実の安定生産を目指しましょう。

まず、一次生理落果のピークが終了する6月下旬から7月上旬頃にかけて、中晩柑類および着果の多い極早生温州から粗摘果を行います。

小原紅早生、高糖系温州や不作傾向の樹などは、「後期重点摘果」で対応し、9月以降まで仕上げ摘果を遅らせて品質向上を目指しましょう。「後期重点摘果」については、次号で触れたいと思います。

(2) 隔年結果を是正するための摘果

温州ミカンにおいて、豊作不作を繰り返す「隔年結果樹」は、豊作年に、樹冠上部や主枝・亜主枝単位で全摘果を行い、翌年の結果母枝を確保します。取組みやすさや次年産の着花の確保を考えると、「樹冠上部摘果」が望ましいです。処理時期は、6月中旬から7月上旬で、主枝先端から樹冠上部3分の1程度に着果した果実を全摘果します(写真2、3、4、5)。摘果後の芽摘いを良くするため短期



写真2 樹冠上部摘果後の夏芽の発生(青色囲み)



写真3 樹冠上部摘果した樹の着果状況



写真4 樹冠上部摘果した翌春の上部の着花



写真5 樹冠上部摘果した翌春の下部の着花(※前年着果部位でも、着花が確保)

間で行うように努めましょう。残果があると新梢の発生に影響しますので、再度確認することが大切です。摘果約2週間後から夏梢が発生しますので、新梢へのミカンハモグリガ等の防除も忘れずに行います(夏梢発生後10～14日間隔で2～3回実施)。

(3) **摘果剤を利用した摘果について**
 摘果の省力化を図るために、着果の多い樹では、摘果剤(ターム水溶剤、フィガロン乳剤)による摘果方法があります。ターム水溶剤は、成分の根への移行はほとんど見られないため、樹勢への影響が少ないと考えられます。

樹全体を全摘果する場合は樹全体に、部分的に全摘果する場合は摘果したい部分のみに散布します。品質が上がりやすく、着色が劣る内・裾成り果を重点的に落としたり、樹冠上部を全摘果したり、樹全体を間引き摘果したい場面で利用できます。全摘果を目的として散布した際に、散布だけでは落ち切らず残果がある場合は、補正摘果を行います。

なお、摘果剤を利用した摘果は、人力摘果と比較すると、夏梢の発生が少なくなりやすいことに留意してください。

表1にターム水溶剤の摘果目的での使用方法を載せていますので、使

表1 ターム水溶剤の摘果目的での使用方法

適用作物名	使用目的	使用時期	使用回数	使用濃度	散布液量	使用方法	総使用回数
温州みかん	摘果	一次生理落果発生期 (満開10～20日後)	1回	500～ 1,000倍	250～500ℓ /10a	立木全面散布 または 枝別散布	4回以内 (一次生理落果 発生期は1回以 内、二次生理落 果発生後は3回 以内)
		二次生理落果発生期 (満開20～40日後)	1回	1,000～ 1,500倍			
かんきつ (温州みかん を除く)	摘果	生理落果発生期 (満開10～50日後)	1回	1,000～ 1,500倍	250～500ℓ /10a		3回以内

主な注意事項

- 温州みかんにおいて、摘果を目的に使用する場合は、一次生理落果発生期(満開10～20日後)または二次生理落果発生期(満開20～40日後)で合計1回とし、2回使用しない。
- 全摘果したい場合は樹全体に、部分的に全摘果したい場合は摘果したい部分のみに散布する。
- 全摘果目的で、効果を高めたい場合は、気温が高くなることが予想される日にたっぴりと散布する。
- 間引き摘果の目的で使用する場合は、薬液が葉先から滴り落ちない程度に少なめに散布する。高温下(30℃以上)での散布または散布後に高温が2～3日続くと過摘果になるおそれがあるので、気象条件を見極めてから散布する。また、本剤散布の4～5日前または散布後4～5日の間にマシン油乳剤を近接散布すると過摘果になるので避ける。
- 本剤による摘果が終了した後に仕上げ摘果を行い、品質の均一化や樹勢の維持に努める。

用に当たっては、使用時期や注意事項などを参考にしてください。

4 マルチ被覆の準備

近年、温州ミカンで糖度上昇期や収穫前での極端な降雨により、果実品質等の低下(低糖、低酸、大玉化、浮皮)が発生するため、マルチ被覆等の高品質化対策技術が、これまで以上に重要です。特に、小原紅早生は、マルチ設置可能な園地では必ず行い、品質向上を心掛けましょう。

設置は早めに準備し、夏場の暑い時期は避けるようにしましょう。直管パイプなどで巻き上げ式にすると、事前に設置して、巻き上げておくことができ、さらに土壌水分の管理がしやすくなります(写真6)。



写真6 マルチ巻き上げ後の様子

5 苗木の管理

カンキツの苗木は、十分な管理をしないと樹冠拡大に多大な時間を要し、未収益期間が長くなります。接木部から15cm程度までの下部に発生した枝は、全て芽かぎするとともに、上部は1新梢1芽に内向きを芽かぎし、強い春枝にします。(写真7)主枝候補枝が伸長したら、支柱で誘引して立たせ、骨格を形成します。

土壌の湿り具合と天候に応じて、早めにかん水を行うことを心掛けてください。肥料は切らさないように、窒素主体の肥料を用い、1樹当たりの年間窒素量については、1年目は50g程度で、5月から1〜2か月間隔(冬季を除く)で5回(菜種油粕の場合、1回当たり200g程度)、2〜3年目は80〜100g程度を目安に、3月から6回施用し、新梢の伸長



写真7 主枝候補枝を残した苗木の様子

や充実を図ります。

また、未結果樹限定ですが、新梢に有害するミカンハモグリガやアゲハの幼虫を対象として、5月中下旬頃にエクシレルSEの高濃度散布(100倍)を行うと効果的です。6月以降も、アブラムシ類も含め、1〜2か月間隔でモスピラン顆粒水溶性などの農薬も活用しながら、防除を行っていきましょう。

6 夏肥の施用

夏肥は、樹体に吸収された後に新梢、果実や根などに分配され、樹勢の維持・向上となり、次年産の着花確保につながります。着果の多い温州ミカン、中晩柑類を対象に施用し、5月下旬頃に、早生温州ミカン・普通温州ミカンでは窒素成分で5〜7kg/10aを、中晩柑類では、窒素成分で7kg/10a程度を施用します。

マルチ栽培や完熟越冬栽培では、樹体に負担がかかるため、特に、夏肥の施用を心掛けてください。一方、不作樹では着色不良や果皮が厚くなり、糖度の低下などの恐れがあるので、控えます。



JA香川県
西讃営農センター園芸課
三豊みかん共同採果場駐在
担当 山野 裕貴

3月に寒気の流れ込みがあり、曇天が続いたことで生育の遅れが心配されましたが、4月以降は気温が高いい日が多いことから生育は平年並となっております。今後、乾燥気味で推移した場合、着果量の多い園地では小玉果が多くなる場合がありますので、大玉果生産を促すためのかん水も重要な作業となります。

1 かん水

降雨が少なく、土壌が乾燥する場合、肥大が抑制され、果肉が硬くなります。また、収穫前に乾燥が続いた後の降雨によって裂皮が生じる恐れがあるので乾燥が続く場合にはかん水を行いましょう。

敷きわらをする事で地温や土壌水分の変化を抑えることができず。また、夏期には干害を防ぎ、根の伸長を促して肥料成分の吸収を良くするため、次年度の増収効果もあります。

しかし、排水の悪い園地では効果は低く、根元までわらを敷くと紋羽病の発生を助長し、生育が悪くなる

ので注意が必要です。

2 収穫

果実は収穫2〜3週間前になると果皮の緑色が淡くなり、成熟期を迎えます。その後、果皮が黄色くなり、さらに赤みを帯びてくると完熟になります。

果実全体が橙黄色になる完全着色期に収穫しますが、収穫適期は非常に短く、早すぎると酸味が残り、遅れるとしなび果や裂果などの障害果が発生し、商品価値が低下します。外観の観察や食味などで熟度を見極めて収穫適期を逃さないようにしましょう(写真1)。

成熟期は、一樹の中でも枝や位置

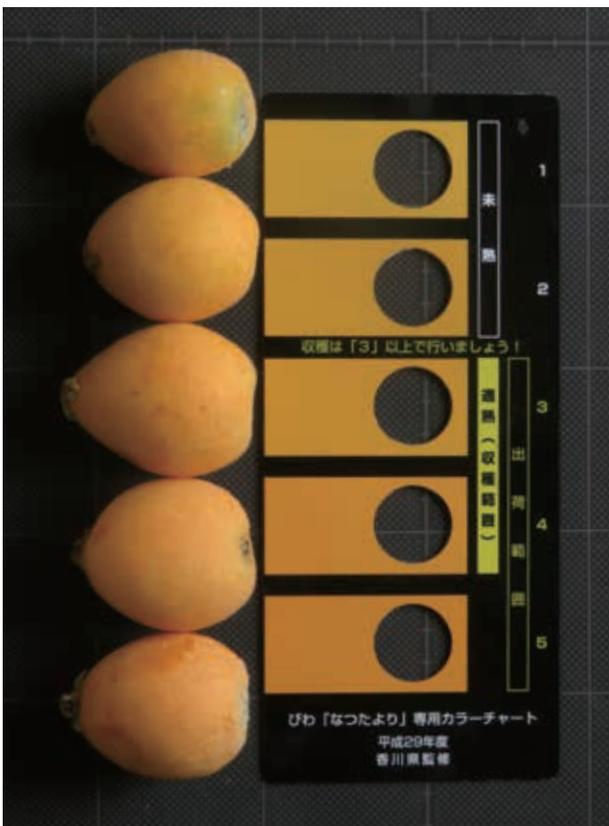


写真1 着色による熟度の違い「なつたより」

によって異なります。枝毎の成熟は、中心枝の果房が副梢の果房より早く成熟します。着果位置では、樹の下部より上部が、内なり房より外なり房が早く成熟します。そのため、収穫は一樹を2〜3回に分けて行います。

果実の鮮度を保つために収穫は早朝の果実温度の低い時間帯に行います。やむを得ず日中高温時に収穫したものは、風通しのよい日陰でしばらく保管し、果実温度を下げましょう。

果実は非常に傷つきやすいため袋に入れたまま収穫し、衝撃を与えないよう丁寧に運びましょう。乱暴に扱うと果実が果梗部から脱落した

り、打ちみによってロス果が発生します。また、袋の中で擦れることで果面の毛茸が取れて商品価値が低下してしまうこともあります。

3 夏肥の施肥

収穫直前に年間窒素施用量の三割程度を速効性肥料で施用します。

施肥が早すぎると窒素の早効きにより、果肉が硬くなり、へそ青症が発生することがあり、遅すぎると新梢の充実が遅れてしまいます。また、過剰施用すると果実の熟期が遅れるので適量を心がけましょう。

4 ビワキジラミに起因する「すす病」

ビワキジラミに起因する「すす病」によって黒く汚染された果実は、商品価値が著しく低下してしまいます。袋かけ前の防除で被害は軽減できますが、それでも発生した場合は家庭選別を徹底し、被害果を除きましょう。収穫時にビワキジラミの被害が多く見られた園地は、収穫終了後(7月中旬頃)に防除を樹冠内部まで十分薬液が届くよう丁寧に実施しましょう。



1 生育状況

今年の気温は1月から2月にかけて高く推移しましたが、3月は平年より低くなりました。そのため開花は平年より遅くなりました(表1)。

2 果実発育

モモの果実肥大は三つの発育段階で構成されます(図1)。
発育第一期は満開後約50日であり、果実の細胞が分裂し、細胞数が増加する期間です。
発育第二期は果実の肥大が一時的に停滞し、核の硬化と胚の発育が盛んになる期間です。この期間は「硬核期」とも呼ばれ、樹体が生理的に最も不安定な時期にあたります。一般に早生品種は短く、晩生品種になるほど長くなります。

発育第三期は硬核期後から成熟期までであり、第一期で分裂した個々の細胞が急速に肥大する期間です。

3 摘果作業

モモの発育第一期は主に貯蔵養分から養われており、養水分の余分な浪費を防ぎ、初期生育を促すために、

表1 香川県農業試験場府中果樹研究所における品種別開花日

品種名	2024年				2023(前年)				平年			
	開花始	開花盛	開花終	収穫盛	開花始	開花盛	開花終	収穫盛	開花始	開花盛	開花終	収穫盛
日川白鳳	4/1	4/4	4/11	-	3/28	3/30	4/6	6/26	3/28	4/1	4/6	6/27
あかつき	3/31	4/2	4/10	-	3/25	3/28	4/5	7/13	3/27	3/30	4/8	7/12
なつおとめ	3/31	4/2	4/10	-	3/26	3/29	4/5	7/25	3/28	3/31	4/7	7/24

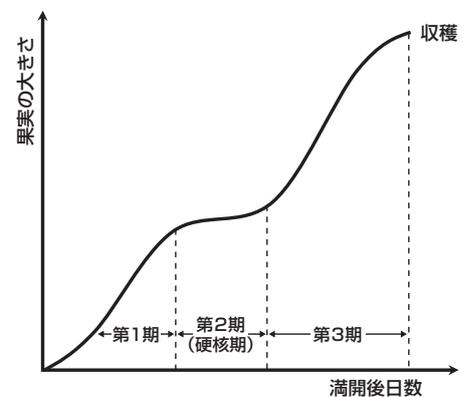


図1 モモの果実肥大(模式図)

摘果による着果制限を行う必要があります。しかし、急激な摘果は核割れや生理落果を助長する原因となるため、粗摘果、仕上げ摘果、見直し摘果により段階的に行うことを心がけましょう。

①粗摘果

満開後20〜30日頃、受精果と未受精果の判断ができるようになった段階から行います。

摘果は発育不良果、上向き果、結果枝の基部や先端部の果実を中心に行い、最終着果量の2〜3倍程度となるよう調整します(表2)。

結果枝別の着果位置として、長・中果枝は中央部から先端寄り、短果枝は先端付近に果実を残します。同一樹内では樹冠上部、外周部は多く残り、下枝は少なめに着果させます。

表2 結果枝別の目標着果数

結果枝	粗摘果	仕上げ摘果
長果枝 (30〜50cm)	中央部から先端寄り 5〜6果	2〜3果
中果枝 (10〜30cm)	中央部から先端寄り 2〜3果	1〜2果
短果枝 (10cm以下)	3〜4本で 2〜3果	3〜4本で 1果

②仕上げ摘果

品種の早晩性によって異なりますが、満開後40〜50日頃から始め、発育第二期(硬核期)に入るまでに実施します。最終的な着果数は、長果枝は2〜3果、中果枝は1〜2果、短果枝は3〜4本で1果程度を目安とします(図2)。

開花後の気温によっては、生育が

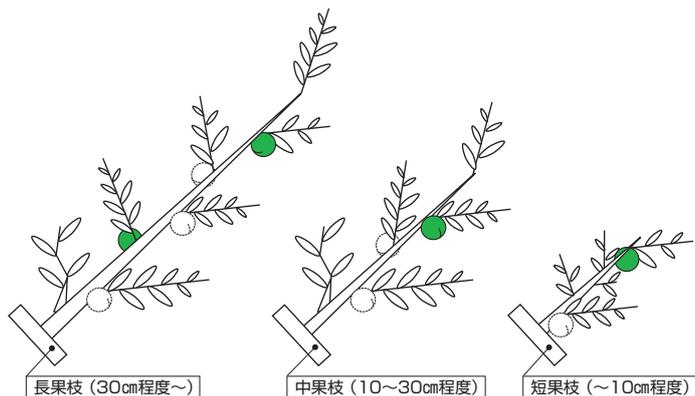


図2 結果枝別の着果状況

促進・抑制されるため、天候も考慮して計画的に実施するよう心がけましょう。

また、縫合線に対して左右が5:5に肥大している果実は双胚果の可能性が高く、生理落果しやすいため優先的に摘果するよう努めます(図3)。

③見直し摘果

満開後60日頃から、これまでの摘果で見落とした果実や変形果、病害虫被害果などを優先的に摘果します。また新梢伸長や果実の肥大を観

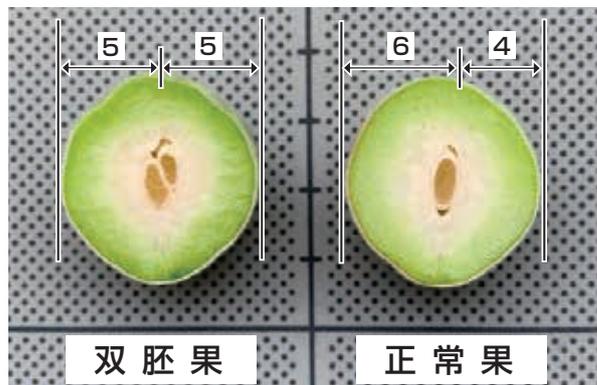


図3 双胚果と正常果

察し、肥大の悪い果実を間引きします。
4 袋かけの時期と留意点

袋かけの前には必ず黒星病、灰星病などの防除を実施してから行いましょう。

仕上げ摘果が終了した段階で、生理落果が少ない品種から取りかかります。この際、風雨によって袋が外れないように固定し、袋の口は完全に密着させて害虫や病害の原因となる雨水が入らないようにしっかりと閉めます。また、葉と一緒に包み込むと着色を妨げたり果面障害の原因となるので注意しましょう。

5 除袋

二重袋は地色(緑色)が抜けて果実

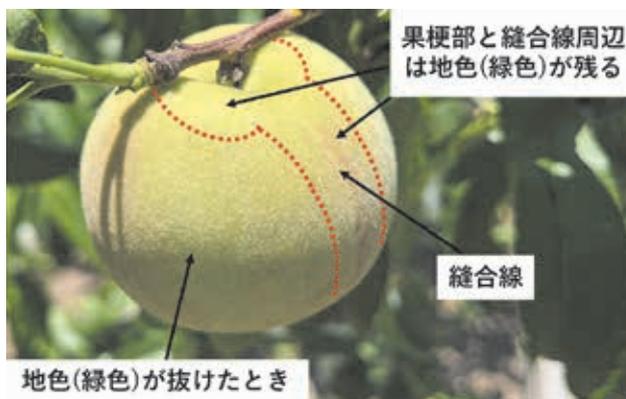


図4 果実袋の除袋時期の目安

6 新梢管理
樹冠内部の日照低下や樹形の乱れを防ぎ、薬剤防除の散布ムラをなくして防除効果を高めることで高品質果実の生産を図ります。結果部位の葉や、来年に向けて充実させたい枝葉が日照不足になると、品質低下を招くだけでなく夏期の花芽分化にも悪影響を及ぼします。

表3 品種別の果実袋の種類と除袋時期の目安

品 種	着 色	袋の種類	二重袋の除袋時期
はなよめ	着色良好	無袋、白色系一重袋	—
日川白鳳	普通	白色系一重袋、二重袋	収穫7日前
みさか白鳳	普通	二重袋	収穫7日前
夢富士	普通	二重袋	収穫7日前
あまとう2号	普通	二重袋	収穫7日前
あかつき	普通	二重袋	収穫14日前
なつっこ	着色良好	二重袋	収穫10~7日前
なつおとめ	普通	二重袋	収穫14日前

新梢管理は新梢の伸長が旺盛になる5月下旬以降から行います。樹冠を拡大するための新梢を確保しつつ、生育が旺盛な徒長枝や過繁茂になっている部位を基部からせん除するほか、陽光面など日焼けしやすい所は摘芯や捻枝を組み合わせて管理を実施しましょう(図5)。

ほ場に水が停滞して根が呼吸困難になると、果実品質の低下や樹勢が衰弱する原因となります。排水の悪い園地では明渠を設けるなど、梅雨時期やゲリラ豪雨に備えて事前に排水対策を行ってください。

(1) かん水
7 土壌管理
 果実肥大期の乾燥は、果実肥大や新梢伸長の生育に大きく影響します。天候や実際の降水量に注意しながら、土壌の乾燥がみられる場合にはかん水を行ってください。

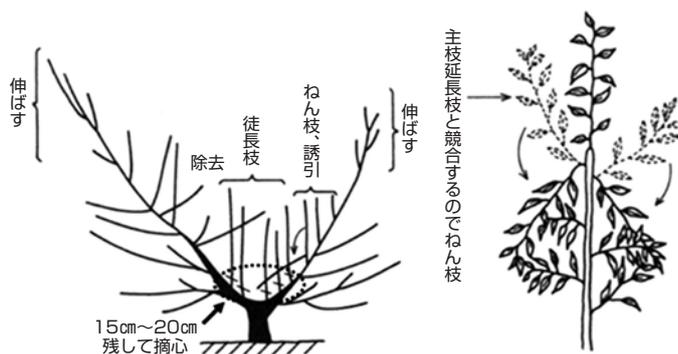


図5 新梢管理の方法

散布時期		病害虫名	基幹防除				
早生種	中生・晩生種		薬剤名	使用濃度	100ℓ当たりの薬量	使用時期(収穫前日数) / 使用回数	10a当たり散布量
5月10日頃		カイガラムシ類	トランスフォームフロアブル	1,000倍	100mℓ	7日 / 3回	400ℓ
		灰黒星病	ダコレート水和剤	1,000倍	100g	3日 / 3回	
5月下旬 ~ 6月上旬		モモハモグリガシンクイムシ類	エクシレルSE	2,500倍	40mℓ	前日 / 3回	500ℓ
		灰黒星病 ホモプシス腐敗病	ファンタジスタ顆粒水和剤	3,000倍	33g	前日 / 3回	
6月10日頃 (収穫前)	6月10日頃	アブラムシ類 モモハモグリガシンクイムシ類	Ⓜモスピラン顆粒水溶剤	2,000倍	50g	前日 / 3回	500ℓ
		灰黒星病	オンリーワンフロアブル	2,000倍	50mℓ	前日 / 3回	
6月中下旬		ハダニ類	ダニサラバフロアブル	1,000倍	100mℓ	前日 / 2回	500ℓ
—	7月1日頃	アブラムシ類 モモハモグリガ	スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	50g	前日 / 3回	500ℓ
		灰黒星病	ベルコート水和剤	1,500倍	66g	前日 / 3回	

8 病害虫防除



5月は、無加温栽培では軸長の調整や摘粒などの房づくり作業、トンネル栽培では開花期を迎えます。

近年、基準量以上の着房や大房を生産したり、良い房を見極めるために生育期間の遅くまで着房させたりすることによる過度の負担などによって、樹勢が低下した園地が増加しています。樹勢の低下は、果粒の肥大不足・糖度上昇の停滞を引き起こします。

特に令和5年産については加温栽培において長梅雨十曇天続きにより糖度不足となり出荷遅れが発生しました。また収穫期の遅延によるかすり症の多発にもつながります。

思い切って早めに摘房と軸長調整を行い、適正基準を遵守することで、高品質果実の生産および樹勢の維持につなげましょう。

1 シヤインマスカット

(1) 新梢管理

新梢の本数は、主枝1mあたり両側で7〜8本にします(写真1)。過繁茂を避けることで、受光環境の改

表1 香川県のシヤインマスカットの生産基準(成木)

作型	収量 (kg/10a)	果房重 (g)	着房数 (房/10a)	着粒数 (粒/房)	果粒重 (g)	主枝1mあたり着房数(両側)
加温	1800	650~700	2500	36~38	17~19	5
無加温	2000		3000	38~40	16~18	6
トンネル				40~43	15~17	



写真1 適切な枝管理状況 (結果枝の間隔は25cmが目安)

善、病害虫の発生予防を実現できます。また、花振るいの軽減(開花前)および果粒肥大の促進とスムーズな増糖(生育期)を目的として摘心を行います。

シヤインマスカットは特に摘心の効果が高いので必ず行ってください。

摘心は、結果枝の房先5枚目の葉(元から8枚程度)が展葉した時点で先端の未展葉部分を摘み取ります。なお、葉の枚数が多少増減しても果実品質に大きな影響はないため、数本の結果枝を確認して一定の長さを決め、その基準で一斉に摘心することとで、効率的に行うことができます。副梢は房までを2枚、房から先は1枚で摘心します。シヤインマスカットは副梢の発生頻度が高いため、こまめな摘心が重要です。



写真2 房型が悪い房

(2) 摘房

房数の基準は、樹勢が健全な成木では、主枝1mあたり両側で6房(加温栽培では同5房)です。房型が悪い房や花振るいした房を優先的に摘房します(写真2)。周囲に不良な房がなかった場合でも、基準を遵守し、空枝をつくって下さい。摘房が遅れると、着果過多により樹勢低下するとともに、その後の管理において余分な作業時間を浪費することにもつながります。もったいない、という思いは持たないようにしましょう。

また、3年目までの若木については、樹の骨格づくりのため、着房させないようにしましょう。

(3) 軸長の調整

2回目のジベレリン処理直前時点での軸長が8cm(10〜11車)となるよう調整します(写真3、写真4)。シヤインマスカットは果房上部の果粒が上を向きにくく、肩部が巻きにくいいため、早期の軸長調整が重要です。原



写真5 房尻を切除する場合



写真4 軸長調整後



写真3 軸長調整前
(ジベ2回目直前)

則として肩部を切り下げて調整しますが、房尻が間延びしている場合や粗着な場合では房尻を切除します(写真5)。ただし、房尻を切除すると、果房が横に張り、房型整形が難しくなるため、なるべく房尻を活用するようにしましょう。

(4) 粗摘粒

摘粒作業は、1回目のジベレリン

処理後3〜5日目から始め、軸長の調整とともに実施することで、その後の作業効率が上がるとともに、果粒肥大や粒揃いが向上します。小粒果、内向き果、傷害果を優先して摘粒し、最終着粒数の1割増しを目安にします。

(5) 仕上げ摘粒

2回目のジベレリン処理の後、硬核期までに仕上げ摘粒を行います。この際、横並びになっている粒の間隔を十分に空けることを意識します。間隔が狭いと、果粒が肥大の途中で内側に押し出され、玉直しの時に取り出せなくなる可能性があります。上下に連なった粒は、玉直しの時に比較的動きやすいことから、無理に摘粒する必要はありません。

(6) 硬核期・玉直し

満開後30〜45日の間は硬核期となります。この時期に摘房や摘粒などの房管理・極端な副梢管理・極端なかん水は「絶対に」行わないようにして下さい。樹体内の環境が大きく変わると、縮果症の発生を引き起こします(写真6)。また、縮果症が発生した果粒についても、硬核期の間は除去せず、果粒軟化後に摘粒して下さい。また、この期間中に玉直しを行うことで、房型を向上させることができます。内側に入り込んだ果粒は外

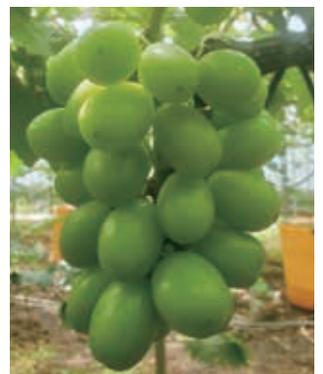


写真8 玉直し後(果粒を縦に並べて肩巻きを良くする)



写真7 玉直し前(内側に入った果粒は外側に出す)



写真6 縮果症が発生した果粒

側に出し、交差している果粒は並び替えて整理することで、果粒がきれいに並びようになります(写真7、写真8)。なお、果粒に直接触ると果粉が剥がれるため、作業の際には手袋を着用したり、割り箸を利用したりするようにしましょう。

(7) 見直し摘粒

樹の半分程度の房で果粒軟化（水回り）が確認できた段階で、房管理や副梢管理を再開します。見直し摘粒では、横に張り出して房型を損なう果粒や未熟果（石ぶどう）、小粒果を除去します。

(8) 袋かけ

房管理が完了すれば、アザミウマ類の防除を実施した後、袋かけを行います。原則としては白色の果実袋を用いますが、果房に直射日光が当たりやすい部分などでは、遮光率が高い袋を利用したり、袋の上にカサをかけたたりすることで日焼け障害を避けることができます。

2 ピオーネ

(1) 新梢管理

新梢の本数は、主枝1mあたり両側で10本にします。結果枝先端は房先8枚程度、副梢は房までは1〜2枚、房より先は0〜1枚を目安に摘心を行います。

(2) 摘房

房数の基準は、樹勢が健全な成木では、主枝1mあたり両側で6房です。ピオーネでの着果過多は、着色不良の大きな原因となります。樹勢に応じて適切な着房数に調節しましょう。

(3) 軸長の調整

2回目のジベレリン処理直前時点

での軸長が5cm（7〜8車）となるよう調整します。1房500〜550gの房を目指しましょう。

(4) 摘粒

小粒果、内向き果、傷害果を優先して摘粒し、1房あたり35〜40粒になるよう仕上げます。ジベレリン一発処理を行った園地については、初期肥大が良好であるため、内側に入った果粒は早めに除去します。

着色初期に、飛び玉状にいくつかの果粒が濃く着色し始める状態が良好です（写真9）。房全体がぼんやりと着色し始める場合には、この時点でも摘房・摘粒を行い、着色を促して下さい。



写真9 良好な着色初期

(5) 環状剥皮

5年生以上の成木において、樹勢が強く果粒肥大が良好で、着色不良となりやすい樹については、環状剥皮の実施を検討しましょう（写真10）。処理により、着色向上が望めます。なお、着果過多の樹については、



写真10 環状剥皮処理

処理の効果は望めませんので、まずは、適正着果量への調節を第一に考えて下さい。また、若木や樹勢が弱った樹において処理を行うと、根の生育が不良となり、樹が枯死する場合もあるので実施しないようにして下さい。

環状剥皮の手順については以下の通りです。

① 処理時期は満開後30〜40日です。適期を逃すと効果が劣るので、適期以外では実施しません。

② 剥皮処理は、主幹に幅5mm〜1cmで行います。これ以上に幅を広げても効果は変わらず、癒合不良にもつながります。

③ 切り込みを入れていき、刃が止まったところが木質部となります。

④ 内側の薄皮まできれいに除去します。薄皮が少しでも残ると、効果が大きく劣ります。マイナスドライパー等で仕上げるときれいに剥くことができます。

⑤ 剥皮部にトップジンMペースト等の癒合促進剤を塗布後、ビニールテープなどで保護します。

⑥ 約1か月後にテープを除去します。除去が遅れると、癒合部にテープが食い込み、癒合不良によって樹勢が低下する可能性があるため気をつけましょう。



カキ

JA香川県
中讃宮農センター
綾歌南部集荷場
担当 **神余 泰彰**

本年は1月から2月にかけて平年より2〜3℃気温が高く推移しましたが、3月以降、気温が上がらなかつた為、発芽と展葉時期が遅れました(表1)。摘蕾、新梢管理が遅れないよう、こまめな作業が重要になります。また昨年の暖冬により、カイガラムシの発生が懸念されますので、適期防除等の対策をお願いします(写真1)。



写真1 越冬していたカイガラムシ

1 摘蕾

摘蕾は今後の果実肥大に大きく関わる作業となります。早めに摘蕾を行い、着果量を調整することで果実肥大に必要な細胞を増やし、安定し

表1 主要品種の生育ステージ(香川農試府中果樹研)

品種名	2024年		2023年				平 年			
	発芽	展葉	発芽	展葉	満開	収穫盛期	発芽	展葉	満開	収穫盛期
早 秋	3/22	3/30	3/18	3/22	5/13	10/11	3/14	3/25	5/14	9/29
太 秋	3/24	4/3	3/20	3/28	5/14	10/2	3/21	4/1	5/13	9/29
松 本	3/25	4/3	3/20	3/25	5/16	11/8	3/19	3/30	5/16	10/29
富 有	3/25	4/3	3/20	3/25	5/17	11/15	3/21	3/31	5/18	11/15

※平年は過去10年間の平均

た大玉生産を目指しましょう。
基本的に太秋や富有は1つの結果枝につき1蕾とし、早秋については2蕾として下さい。奇形や生育の遅いもの、新梢の基部に着いたものは除去しましょう。樹勢が弱い細い枝にはしっかりと着果しない場合がありますので、充実した枝に蕾を残すようにして下さい(写真2)。

残す蕾

- ・新梢中央部
- ・大きいもの
- ・へたの大きいもの
- ・横、斜め下向きのもの
- ・傷のないもの

除去する蕾

- ・新梢基部の一番目
 - ・葉が5枚以下、弱い新梢に着果するもの
 - ・奇形
 - ・近接する枝に当たるもの
 - ・主枝、亜主枝の新梢に着生するもの
 - ・二番花
- また果実が肥大した際に他の枝で傷がつくことがありますので枝同士が密集しないように注意して下さい。



写真3 炭疽病が発生した新梢

2 新梢管理
 枝同士が密集すると日当たりや、農薬散布に影響が出るため、果実の肥大不良や病害虫発生を引き起こす要因となります(写真3)。新梢の向きと日当たりを勘案し、不要な枝を除去しましょう。翌年産の結果母枝とする為に新梢が固くなり誘引が難しい場合は捻枝を行い、枝づくりをしましょう(図1)。

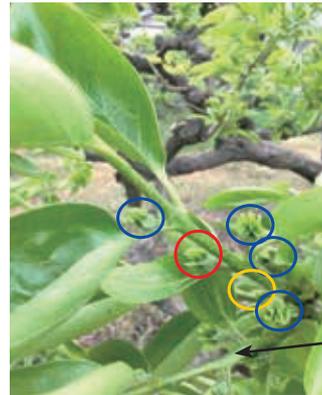
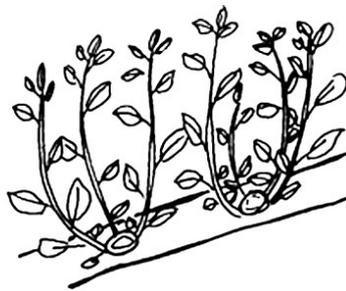
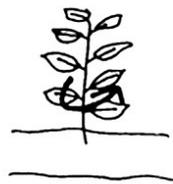


写真2 富有の摘蕾について

- 残す蕾
- 除去する蕾
- 二番花(除去)
- 裏枝は枝ごと除去



芽かきで整理



第1段階
ねじる



第2段階
まげる

側枝の欠損した部分には誘引等で枝作り

図1 新梢管理

3 かん水
 開花後、晴天が続く場合、7〜10日おきにかん水を行って下さい。特に若木、苗木は乾燥に弱いので注意しましょう。

4 病害虫防除
 降雨が長く続くと炭疽病や灰色カビ病などの病気が出やすくなる為、農薬の散布だけでなく、排水対策や通風の改善を行って下さい。



キウイフルーツ



JA香川県
東讃営農センター
土庄集荷場
担当 山本 祐哉

1 生育状況

(1) 府中果樹研究所における発芽日データ

発芽は、平年に比べ6日程度遅く推移しました。4月に入り断続的な

品 種	発 芽 日		
	令和6年産	平年値	令和5年産
香緑	4月4日	3月29日	3月25日
讃緑	4月4日	3月28日	3月24日
さぬきゴールド	4月3日	3月28日	3月24日
さぬきエンジェルスイート	3月28日	3月23日	3月17日
さぬきキウイっこ(3号)	3月9日	3月11日	3月9日
さぬきエメラルド	3月28日	3月21日	3月17日
ハイワード	4月3日	3月28日	3月24日
マツア	4月2日	3月28日	3月22日
トムリ	4月8日	3月30日	3月24日

降雨が続く生育はやや遅れています。

2 受粉

(1) 花粉の採取

① 開花直前から当日開花した花を採取します。

② 採粉器で葯を採取します。

③ 採取した葯をふるいにかけて、花びらや不純物を取り除きます。

④ 常温で一昼夜開葯させます。

⑤ 100〜120メッシュのふるいで花粉を採取します。

(2) 花粉の貯蔵

① 花粉を5〜10gに小分けします。

② 花粉を薬包紙などで包みます。

③ 湿気防止のためシリカゲルを入れた茶筒などで密閉します。

④ 冷凍室の温度変化の少ない場所で貯蔵します。

(3) 液体受粉について

① 冷凍花粉を使用する場合は、使用する1〜2日前に乾燥材を入れたまま冷蔵庫に入れ解凍し使用します。

② 混合する時は、まず大きめのペットボトル等に花粉を入れ、少量の花粉増量剤(花みらい等)でよく振ります。

③ その後花粉増量剤入れて250倍まで希釈します。

④ 花粉の泡が消えるまでよく振り

ます。(2〜3分程度)

⑤ 十分に混合された液を受粉用スプレーに移し受粉します。

⑥ 注意事項

(ア) 気温が15度以下の時は、受粉効果が低下するため受粉は行わないようにします。

(イ) 混合液は、混合後2時間までに使用します。(混合は時間が経過すると発芽率が低下します。)

(ウ) 混合液は、時間が経過するとスプレーの下に花粉が沈殿するので、時々容器を振り花粉を混合します。

(4) 粉末受粉について

① 石松子等の増量剤で10〜20倍に希釈した花粉をポレンダスター等で柱頭にむらなく吹きつけます。10a当たりの必要量は約200〜400gです。

② 雌花の受精可能期間は開花3日後までです。花弁が褐変しないように受粉します。

③ 開花始めと満開期と満開後の3回程受粉します。



府中果樹研究所における満開期

品 種	令和5年	令和4年	令和3年	令和2年	令和元年	平 年
香 緑	5/15	5/16	5/14	5/18	5/18	5/18
ヘイワード	5/14	5/15	5/14	5/18	5/18	5/18
さめきゴールド	5/6	5/7	5/2	5/9	5/9	5/8
さめきエンジェルスイート	5/3	5/5	4/30	5/7	5/8	5/6
さめきキウイっこ(3号)	5/1	5/2	4/30	5/4	5/5	5/4
さめきエメラルド	5/4	5/5				
マツワ	5/15	5/13	5/9	5/14	5/18	5/15

※実際の生育状況に応じて受粉作業の準備を行いましょう。

3 摘果

異常気象等の影響により、樹勢低下園が見られます。樹勢維持・回復のためにも着果過多にならないよう、その樹に応じた着果管理を行いましょう。

(1) 摘果する果実

▼側果、扁平果、すじ果、小玉果、病害虫被害果など。

(2) 時期

▼1回目は開花後15日頃から行い、早めに一通り行います。

▼2回目は仕上げ摘果とし、満開後30日までには終わらせませす。

(3) 摘果の程度

▼葉果比は5〜6枚/果、1㎡当たり15〜20果(「さめきゴールド」は10〜15果)を目安とし、結果枝単位では以下の表のとおりとします。

4 袋かけ(着果量の確認をしましょう!!)

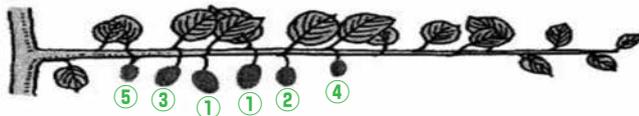
○果実軟腐病とカイガラムシ類の防除を行ってから、随時袋かけを行います。

○すれ傷の発生に注意(特に「さめきゴールド」)、果実が小さい段階で実施します。

キウイフルーツ摘果基準

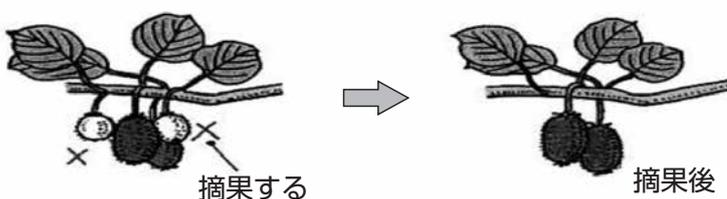
品 種	枝 長	枝 に 残 す 果 実 の 数				
		10cm以下	30cm以下	90cm以下	120cm以下	120cm以上
香 緑		2〜3本に1果	1果	2果	2〜3果	2〜3果
ヘイワード		2〜3本に1果	1果	2果	3〜4果	4果
さめきゴールド		0果	1果	2果	2果	2〜3果

長果枝の例



果実のついた位置による肥大の良否。番号順に肥大がよいので①②③の順に残す。

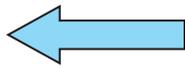
短果枝の例



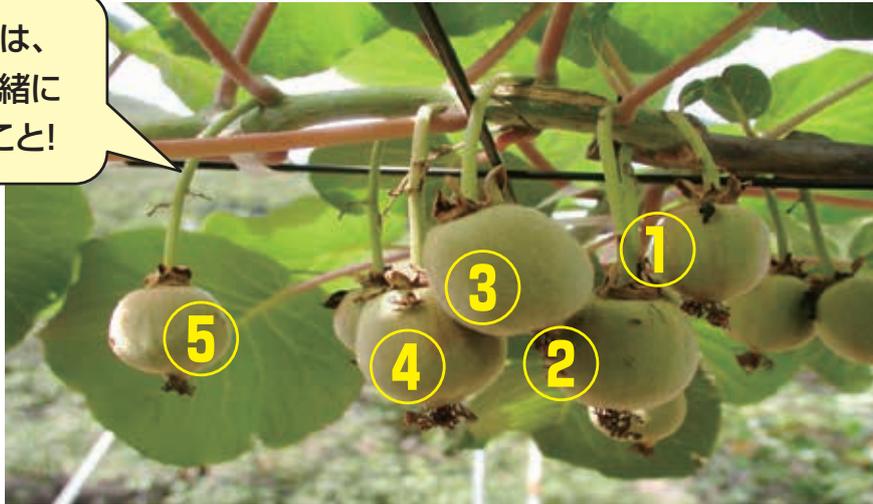
短果枝にはかたまって着果し、位置による肥大の順位がないので、正常な果実を1〜2個残す。

(4) さめきゴールドの摘果

摘果の際は、
果梗も一緒に
取り除くこと!



先端



基部

- ▼最も基部側の果実①は小玉になりやすい（香緑やヘイワードは扁平果に）
 - ▼果実②③④は、肥大するが重なりやすい（風ズレやキイロマイコガの被害の恐れ）。
 - ▼果実⑤は、果実②③④に比べて小玉になりやすい
- 残す果実は②と④。横方向に大きく肥大するため、果実間隔は十分空ける！**

キウイフルーツの品種別の収量目標

品種	1㎡当たり 着果数	着果数/10a	平均果重	収量 /10a
ヘイワード	20~25果	20,000~ 25,000果	110~130g	2.2~2.5t
香 緑	15~20果	18,000~ 20,000果	100~110g	1.8~2.0t
さめきゴールド	10~15果	10,000~ 15,000果	140~160g	1.8~2.0t

⑤ 土壌管理

- 集中豪雨による根腐れを防ぐため、畝立てや排水溝の整備等排水対策を行います。
- 降雨がなく、乾燥が続く場合は適宜灌水します。



強風による枝折れに
注意しましょう。



乾燥続いた後の降雨等の影響により
品種によっては、裂果が多く発生します。
摘果時に見落とさないようにしましょう。



4月~5月頃に見られた葉の黄変
乾燥が続く場合、園地に応じたかん水を
します。

6 病害虫防除

香緑・ヘイワード・讀緑

月旬	基幹防除						応急防除						
	対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ当たりの薬量	使用時期(収穫前日数、使用回数)	10a当たりの散布量	対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ当たりの薬量	使用時期(収穫前日数、使用回数)	10a当たりの散布量	
5	上												
	中	カイガラムシ類	トランスフォームフロアブル	1,000倍	100ml	3日、3回	400ℓ	灰色かび病(降雨が多い場合)	ロブラール水和剤	1,500倍	66g	開花期~落花期、4回	400ℓ
	下	果実軟腐病	トップジンM水和剤	1,000倍	100g	前日、5回							
6	上	キウイヒメヨコバイ キイロマイコガ	ⓂパダンSG水溶剤	1,500倍	66g	30日、3回	400ℓ	カメムシ類(発生時)	スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	50g	前日、3回	400ℓ
	中	果実軟腐病	ベルコート水和剤	1,000倍	100g	前日、5回							
	下							果実軟腐病(降雨が多い場合)	ベルコート水和剤	1,000倍	100g	前日、5回	400ℓ

さめきゴールド

月旬	基幹防除						応急防除						
	対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ当たりの薬量	使用時期(収穫前日数、使用回数)	10a当たりの散布量	対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ当たりの薬量	使用時期(収穫前日数、使用回数)	10a当たりの散布量	
5	上												
	中	灰色かび病	ロブラール水和剤	1,500倍	66g	開花期~落花期、4回	400ℓ						
	下	カイガラムシ類	トランスフォームフロアブル	1,000倍	100ml	3日、3回							
6	上	キウイヒメヨコバイ キイロマイコガ	ⓂパダンSG水溶剤	1,500倍	66g	30日、3回	400ℓ	カメムシ類(発生時)	スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	50g	前日、3回	400ℓ
	中	果実軟腐病	ベルコート水和剤	1,000倍	100g	前日、5回							
	下							果実軟腐病(降雨が多い場合)	ベルコート水和剤	1,000倍	100g	前日、5回	400ℓ

さめきエンジェルスイート

月旬	基幹防除						応急防除						
	対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ当たりの薬量	使用時期(収穫前日数、使用回数)	10a当たりの散布量	対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ当たりの薬量	使用時期(収穫前日数、使用回数)	10a当たりの散布量	
5	上												
	中	カイガラムシ類	トランスフォームフロアブル	1,000倍	100ml	3日、3回	400ℓ	灰色かび病(降雨が多い場合)	ロブラール水和剤	1,500倍	66g	開花期~落花期、4回	400ℓ
	下	果実軟腐病	トップジンM水和剤	1,000倍	100g	前日、5回							
6	上	キウイヒメヨコバイ キイロマイコガ	ⓂパダンSG水溶剤	1,500倍	66g	30日、3回	400ℓ	カメムシ類(発生時)	スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	50g	前日、3回	400ℓ
	中	果実軟腐病	ベルコート水和剤	1,000倍	100g	前日、5回							
	下							果実軟腐病(降雨が多い場合)	ベルコート水和剤	1,000倍	100g	前日、5回	400ℓ

※生育状況に応じて防除を行いましょう。



はじめに

農薬の登録内容は随時更新されているため、使用前日数や回数、希釈倍数等については使用前にラベル等で確認しましょう。また、農薬散布の際には、近接圃場の栽培作物、学校などの公共施設や住宅地等に農薬が飛散しないよう細心の注意を払いましょう。

● カンキツ

1 灰色かび病

開花期前後に多湿条件が続くと、病原菌の胞子が花弁に付着して繁殖します(写真1)。幼果にその花弁が長期に付着すると接触箇所がかさぶた状の傷となり、商品価値の低下につながります。菌の増殖を抑えるために適正な整枝剪定を行い、樹冠内部の通風、採光を良くしましょう。

2 黒点病

枯れ枝で越冬した病原菌の胞子



写真1 かんきつ 灰色かび病

3 かいよう病

葉や枝に形成された越冬病斑が、第一次伝染源となります。降雨の際に、越冬病斑から病原菌が、春梢に伝染していきます。感染は新葉や軟弱な枝で起こりやすく、組織が硬化すると少なくなります。新しい病斑ほど病原菌の増殖が旺盛であり、薬害軽減のためクレフノンを加用した銅剤による初期防除が重要です。

が、降雨で葉や果実に伝染します。このため、枯れ枝の多い園や雨量の多い年は被害が多くなります。前回の防除以降の積算降水量200〜250mmを目安に防除暦に記載されているマンゼブを含む殺菌剤(ジマンダイセン、ペンコゼブ、テーク水剤)を、樹全体に薬液がかかるように丁寧に散布してください。

4 訪花害虫(コアオハナムグリ、ケシクスイ類)

開花時期に花粉や花蜜を求めて花に飛来し、幼果に傷を付けます。防除時期は2〜3分咲き頃です。防除暦に記載されている訪花害虫対象の薬剤はエクシレルSEですが、ダントツ水溶性などのミツバチへの影響が大きい薬剤を使用する場合は、圃場近辺に養蜂箱がないことを確認してから使用しましょう。

5 ミカンダニ

梅雨明け頃から発生が急増しますので、その前に高度精製マシン油乳剤(97%)による散布が重要です。マシン油乳剤は、虫体を油で包み込み窒息死させる薬剤ですので、ダニに薬液が直接かからないと効果を発揮しないため、葉裏までかかるように丁寧に散布してください。

● モモ

1 せん孔細菌病

新梢の皮部組織内で越冬した病原菌は、風雨により植物の気孔や傷口から侵入します。葉では穴が空いて落葉することがあります。果実では褐色の不整形の病斑が生じ、ひびが入ったりヤニが出たりします(写真2・葉、写真3・果実)。多発条件は、春



写真2 モモ せん孔細菌病



写真3 モモ せん孔細菌病

2 灰星病

季の高温多雨と6〜8月の低温多雨です。雨が多い場合は5月中下旬頃にマイコシールドを追加散布してください。

前年の発病果(残骸)や枝で越冬した病原菌は4月頃から胞子を形成

し、まず花に感染して花腐れを起こします。次に枝で病斑を形成して、果実への伝染源となります。薬剤防除は本病と同様に果実を腐敗させる病害であるホモプシス腐敗病と兼ねて、5～6月に実施しましょう(写真4)。



写真4 モモ 灰星病

③ モモハモグリガ

展葉直後から被害が見られるようになり、その後、徐々に増えながら発生を繰り返します。5～6月の薬剤防除が不十分な場合には、薬剤の効きにくい卵、老齢幼虫、蛹が混在するようになり、薬剤を散布しても虫が減らない状況になるので、葉に小さいうず状の食害痕を確認したら早期の防除を徹底しましょう。

④ シンクイムシ類

新梢に食入して芯折れ(主にナシヒメシンクイによる加害)を発生させるほか、果実に食入(主にモモノゴマダラノメイガによる加害)して商品価値を無くします。なお、コンフューザーMMを設置しているところでは、ナシヒメシンクイの被害軽減はできませんが、本剤はモモノゴマダラノメイガには効果が期待できませんので、果実被害が認められる場合には追加防除が必要になります。昨年秋季にナシヒメシンクイの発生が多かったことから、より注意しておきましょう。

⑤ カイガラムシ類(ウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ)

近年、地域によってはカイガラムシ類の発生が多い地域が見られます。モモを加害するカイガラムシ類には、ウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシ、ナシマルカイガラムシなどがあります。ウメシロカイガラムシはクワシロカイガラムシより幼虫の孵化最盛期が7日前後早いなど、カイガラムシの種類によって幼虫の孵化時期が異なっており、それに伴い防除適期が異なりますので、地域や圃場内で発生しているカイガラムシ類の種類を確認して防除

を行うようにしてください。

● カキ

① 炭疽病

枝の病斑で越冬した後、降雨とともに新梢に感染し、5月頃には病斑を形成します。6月下旬頃から枝や新梢上の病斑で形成された胞子が果実へ飛散して黒色の病斑を形成します。昨年、被害が多かった圃場においては、越冬菌量も多いと考えられるため、梅雨期の防除は十分に行う必要があります。春梢の発病が多いと果実の被害が多くなるため、発病枝の切除を徹底してください。防除暦に記載されている炭疽病対象の薬剤は保護殺菌剤主体ですので、樹全体に薬液がかかるよう丁寧に散布してください。

② 落葉病類(角斑落葉病、円星落葉病)

前年に落葉した葉の病斑内で越冬し、春先に胞子が形成されます。胞子は空気中を漂い、葉の気孔などから侵入します。発病が見られるのは主に秋以降ですが、感染時期は5月上旬から7月上旬頃で、この時期に防除を徹底しておく必要があります。

③ カイガラムシ類(フジコナカイガラムシ)

本害虫は果実に寄生すると商品価値がなくなる重要害虫の一つです。粗皮の隙間などで越冬した虫が新梢に移動して産卵し、5月中旬～6月中旬に孵化した第1世代幼虫が枝の隙間や幼果のへた付近で見られるようになります。第2世代以降は防除効果が上がりくいいため、この頃が防除の適期です。果実が肥大してからは薬剤がかかりにくくなるので、この時期に十分な散布量で丁寧に防除する必要があります。

④ カキノヘタムシガ

粗皮下の繭の中で越冬した幼虫は5月中旬～下旬に羽化し、結果枝の先端付近の芽に多く産卵します。孵化した第1世代幼虫は芽を食害しながら移動し、果実に食入します。防除適期は幼虫が芽を食害している時期で、越冬世代成虫発生ピーク(例年5月18日～22日頃)の7～10日後にあたります。年によって発生ピークに差がありますので農業試験場病害虫防除所から発表される予察情報等で確認して、適期に防除するようにしましょう。

● ブドウ

① べと病

露地やトンネル栽培では5月～6

月の開花前後から発病し始め、5〜6月に雨が多く低温で経過するよう場合には、開花前に花穂に白いカビを生じて大きな被害となる場合があります。発病後では防除効果が落ちるため、展葉5〜6枚期から定期的に予防散布を行います。防除暦に記載されているストロビードライフロアブル等のQ〇〇剤では、耐性菌が発生しやすいので連用せず、他の系統の薬剤とローテーション防除しましょう。

2 灰色かび病

開花期前後に感染しやすく、この時期の被害が大きい病害です。開花10日前から落花期に降雨や曇天が続くと発病しやすくなります。落花後の幼果では、さび果となって肥大が妨げられます。ハウス栽培では過湿にならないよう換気をはかりましょう。フルーツセイバー等のSDHI剤やストロビードライフロアブル等のQ〇〇剤やトップジンM水和剤などでは野菜や花き類では薬剤耐性菌が確認されていますので、ブドウで本病害対象にこれらの薬剤を使用し、効果が低いと思われる場合は他系統の薬剤を使用するようにしてください。

3 晩腐病

病原菌は結果母枝や切り残した穂

梗、巻ひげ内で菌糸の形で越冬した後、6〜7月の梅雨期に盛んに孢子形成し、雨滴とともに果実に達して感染します。感染後、ほとんど症状を現すことなく潜伏し、果実の酸が減少する着色期になって発病します。手で発病を見てからの防除では手遅れになります(写真5)。このため薬剤防除は落花と小豆粒大の時期に行いましょう。



写真5 ブドウ 晩腐病 (シャインマスカット)

4 チャノキイロアザミウマ

幼果ではかさぶた状の斑点が生じ、穂軸では褐色の皸肌状になり、果実肥大や着色不良などの原因になります。開花期前後の防除を徹底しましょう。また、他県ではアドマイヤー顆粒水和剤などのネオニコチノイド

系薬剤の効果が低い個体群が確認されていますので注意が必要です。

5 カイガラムシ類(クワコナカイガラムシ、フジコナカイガラムシ)

近年カイガラムシ類の被害が増えています。クワコナカイガラムシやフジコナカイガラムシ類の多発園ではスタークル(アルバリン)顆粒水溶剤の樹幹塗布を幼果期までに行うとともに、開花直前にはトランスフォームフロアブルを丁寧に散布しておきましょう。

● キウイフルーツ

1 果実軟腐病

粗皮や老化した枝の組織で越冬した後、6〜7月の梅雨期に盛んに孢子を形成します。孢子は雨滴とともに果実に達し感染します。感染した菌はほとんど症状を現すことなく潜伏し、貯蔵中に発病します。薬剤防除は幼果期〜果実肥大期にトップジンM水和剤を散布しましょう。また、樹勢を適正に管理するとともに、袋かけも有効です。

2 灰色かび病

落弁期と貯蔵中に発生します。他の果樹類の灰色かび病と同様に5〜6月の気温が低く、湿度が高い場合は発病が多くなりますが、落弁期

に雨が多い場合は特に注意が必要です。花弁(花カス)や雄ずいが落下しないで幼果に付着すると、付着部分の毛茸を褐変させ(写真6)、果皮に傷をついたりするため、受粉作業後には花カスの除去を行います。ロブラル水和剤やトップジンM水和剤は野菜や花き類では耐性菌が確認されていますので、本病害にこれらの薬剤を使用して効果が低いと思われる場合は他系統の薬剤を使用するようにしてください。



写真6 キウイフルーツ 灰色かび病

3 かいよう病

感染枝では剪定傷や皮目、亀裂等から病原菌を含む白色又は暗赤色の樹液が漏出する場合があります。伸長中の新梢が感染すると水浸状となり、次第に黒色となり、亀裂を生じて



写真7 キウイフルーツかいよう病:新梢の枯死



写真8 キウイフルーツかいよう病:葉の褐色斑点

萎凋・枯死します(写真7)。また、二次感染した葉に不整形の褐色斑点が発生する場合があります(写真8)。樹体内の1〜2本の枝に発病がみられるなど症状が軽い場合は、圃場全

体に薬剤を散布した後、感染樹の発病部分を切除しましょう。原則として、切除は発病部位(葉、枝等)の基部寄りから行いましょう。圃場全体または特定の品種に甚大な発病樹が見られる場合は、圃場全体に薬剤を散布した後、圃場全体または感染樹を伐採しましょう。伐採した枝・葉は圃場外に出し、埋没または焼却等により感染源にならないように処分しましょう。

本病に酷似した疑わしい症状がある場合は、速やかに最寄りの農業改良普及センターやJA営農センターもしくは農業試験場病害虫防除所へ連絡してください。

4 カイガラムシ類(クワシロカイガラムシ)

キウイフルーツに発生するカイガラムシ類はクワシロカイガラムシ(写真9)が主体です。防除適期は第1世代幼虫の孵化最盛期〜5日程度と言われています。昨年県内7か所での調査を行った結果、5月上旬頃に孵化最盛期が確認されました。近年、暖冬の影響で孵化最盛期が早まっています。防除暦の5月中旬に配置されているトランスフォームフロアブルは幼虫孵化前〜幼虫孵化直後に散布すると効果が高いので、孵化最盛期を確認して適期に散布する



写真9 キウイフルーツクワシロカイガラムシ:クワシロカイガラムシのふ化

ようにしましょう。また、薬液がしっかりとかかるよう丁寧に散布しましょう。

● 共通害虫

1 カメムシ類

昨年は9月〜10月にかけて発生が多く確認されました。幼果が吸汁害で早期に落果したこともあり、今年ので農業試験場病害虫防除所ホームページにある害虫発生動向データなどを参考に発生が多い場合には確認防除を実施してください。